



## ジュニア大使友情使節団

～ “第32回春期パラオ班” ～

パラオ班は、“自然環境と平和”をテーマにパラオ共和国でのホームステイ、学校訪問・交流、日本国大使館と国会議事堂訪問、ペリリュー島での平和学習などを行った。ここに団員の感想文と日誌を抜粋・紹介する。

(関連記事：本紙1月号)

●パラオ班に参加して <sup>かのう つぐみ</sup> 加納 亜美  
新潟県 刈羽村小学校6年  
この研修で感じたことは、平和で過ごせることの幸せです。ペリリュー島で戦争の生々しい残骸や当時の様子を見ました。武器を保存する建物では、鉄砲でうたれた穴がたくさんあり、いつも油断できない緊張があったのだろうと思いました。戦争がどれだけおそろしいか分かりました。戦争は二度としてはいけないと、私たちの子孫に伝えていかなければいけないと思い、そのために今ある残骸などを守っていかなければいけないと考えました。

自宅に帰ってお風呂に入ったしゅん間、「幸せ」を感じました。いままで当たり前だと思っていたことに感謝することもできました。本当にパラオに行ったら良かったなと何度も思います。

●日本とパラオの架け橋 <sup>さほだちゆ</sup> 佐保田千優  
東京都立女子中学校 1年

私がパラオで一番心に残ったものは、それは2日目に行ったペリリュー島とホームステイだ。コロールからボートに乗って移動しているとき、海は真っ青で太陽の光で輝いていた。70年前にはこの地で激戦が行われていた。しかし、今はガラガラと太陽の光が地面を照らしている。まるで今と昔が混在しているかのような世界だった。

もう一つ、心に残ったものはホームステイだ。パラオの人は日本人の私を家族の一員のように温かく迎えてくれた。ホームステイ家庭の一つ上のマヤちゃんにこんなことを言われた。

「この橋は日本とパラオの友情の橋なんだよ」と。

日本の支援で橋もでき、今では日本とパラオは友好的な関係にある。この70年で大きく変わった。きっと、そこには外交や貿易など難しい話もあると思う。でも、ホームステイをして少しでも日本とパラオの距離が縮まれば、国を越えて仲良くなれるのだと思った。私は将来、友情の橋をかけられるような外交官になりたい。日本と海外を結ぶ架け橋になりたいと強く思った。

●3月29日(水) <sup>おにやま いちご</sup> 鬼山 一護 小6  
海にはたくさんのサンゴしょうがあり、水路もありました。サンゴしょうは波をくわいてくれると教えてくれました。確かに、サンゴしょうの上をボートで走ると、あまりボートが揺れませんでした。無人島の名前で、イノキアイランドやクジラアイランドなどのおもしろい名前もありました。

●3月30日(木) <sup>ささき きはるな</sup> 佐々木 陽菜 小6  
今日は、小学校と高校を訪問しました。小学校では8学年の人と一緒に勉強しました。授業内容はとても難しく英語を聞き取るのにも苦労しました。お昼休みにはみんなでサッカーをしました。授業のあと、みんなが小学校を案内してくれました。ココナッツで作った、ペンダントをもらいました。とても嬉しかったです。パラオの人はとてもやさしくて、フレンドリーだと思いました。

●4月1日(土) <sup>こばやし きいち</sup> 小林 輝一 小6  
今日はホストファミリーとロックアイランドに行きました。ホストファミリーの子どもたちとその友だちが遊具を貸してくれたり、寒いかと聞いてくれるなど、気をつけてくれました。パラオの人はやさしいと思いました。船をそうさしてしている人が魚を見つけて取って見せてくれたとき、きれいな魚だと思いました。海がすきとおっていてとてもきれいでした。

## 世界万華鏡

日本語教育 <sup>なが ほすみ お</sup> 永保澄雄 シリーズ⑩

自分史

私は永保澄雄、1929年5月2日生まれ。自分史をメモし、振り返る。

1953年、昭和28年に早稲田大学の教育学部国文科を出た後、1年間、石雲院専門僧堂で雲水をし、その後、ノルウェー宣教師の秘書を勤める。このとき初めて外国人に日本語を教える。それがきっかけとなり、1956年から1972年までの16年間、母校の早稲田大学で留学生に日本語を教えることとなった。在職中、1963年から1965年までの2年間、インドネシアのパジャラン大学で日本語を教えた。

1972年、言語障害学の泰斗(泰山北斗) 神山五郎先生のお招きで大阪教育大学に移り、障害児課程の学生に音声や言語を教えた。このときの専門は日本語教育ではなく障害児教育であったが、1981年に同大学を辞めたあとも、非常勤講師として年に1回、音声と言語の集中講義を行ってきた。

退職した年、国際交流基金の海外派遣日本語教育専門家としてニュージーランドに赴任、同国教育省の日本語顧問として日本語教育に携わる。このときの主たる仕事は、ハイスクールの日本語教師に対する指導・アドバイスであった。ニュージーランド各地やオー



ストラリアを巡回した。

帰国後は国際交流基金で海外からの日本語教師の指導などに当たっていたが、1987年から1989年までの2年間、ブラジル・サンパウロの日本語普及センター(現：ブラジル日本語センター)で日本語教師養成講座を担当した。リオデジャネイロ連邦大学の客員教授も兼任していたが、ここでは主として日本語テキストの作成に協力した。

ブラジルから帰国後、国際交流基金の以前の仕事に戻ったが、秋だけ3期続けて北京の日本学研究中心で音声学と日本語教授法の講義を担当した。対象は中国各地の大学の日本語教師たちであった。

1993年から1998年までの5年間は、京都に住み、龍谷大学で留学生に日本

語を教えた。学部在籍している外国人学生の外、いわゆる別科で一般留学生対象の授業を行った。

1998年3月定年により同大学を退職し、同年4月から財団法人京都日本語教育センター(現：公益財団法人京都日本語教育センター)の京都日本語学校校長となり2001年5月に退職、現在に至っている。

なお1998年～2001年5月まで、龍谷大学の日本語の授業は週1回非常勤講師として出講した。

東京・杉並区のお寺の長男として生まれながら自分の好きな道に進み、尊敬する師に出会い、教え子ができ、良い仲間恵まれ、何と言っても最愛の妻と生きる幸せ者である。

永保澄雄先生は、2017年4月10日に大腸がんのためご逝去されました。享年、87歳。本世界万華鏡欄に海外での暮らしや習慣について頻りに投稿。今回が最後の原稿となりました。

平成29年4月17日発行  
一般社団法人 国際フレンドシップ協会  
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12  
麻布台ロイヤルプラザ703  
発行責任者：及川 伊佐子  
編集：事務局 03(3582)3021  
印刷：音和堂印刷株式会社